

へ安保粉碎 沖縄解放 アジア革命勝利 の旗の下
 アジア反革命同盟 ASPAC 粉
 砕 (6.8.5 川奈現地) 斗争を斗い抜き
 プロレタリア国際主義を蘇生せし
 めよ!

つき進まんとしている。——ヨーロッパを中心たんとしている西独
 同様に、しなし、米英仏から、米日、米独への帝国主義同盟軍の勢

1 火を吹くア

6月4日なり三日間、伊豆・山梨で開かれるASPAC第4回目の開催
会では、ベトナムにおける政治的、軍事的面解放戦線の最終的勝利の肩
運—アジアにおける革命と反革命の力関係の逆転への突破口—の中で
開かれる。それ故、SPACの全性格はそこに規定されている。

參佛國ニ日本、南朝鮮、南ベトナム、台灣、フィリピン、マレーシア、タイ、オーストラリア、ニュージーランドの九ヶ國とオースターリア、ラオス各國の國內政治情勢は、アジアの支配者英に之つて、恐怖と集煙をなしに
は屆られぬ様相を呈してゐる。

南ベトナム、南朝鮮——を以て、今日あらゆる意味において、「アジアの、世界の真の線」である。フィリピンにおいては、昨年来、反米斗争が高まり、ベトナムへの工作、破壊、造反、運動とゲリラ組織「フク団」の本拠、中部ルソンの農村が結合した斗争組織の確立に向なっている。4月18日、米軍基地撤去を要求して二千人の群衆が米田大使館に投石などの激しい斗争をくりひろげたのは、その一例である。

マレーシアは、英軍の撤退を決定された後、国内政治情勢の内部矛盾が爆発し、民族対立を飯食とする階級斗争の激化は、マレーシア政府として「軍隊によるアッカリレ」という最悪の、そしてマルジョアにとってはそれ故最後の手段にでている。

タイのギリヲ斗争は、ベトナムの情勢をうけて一層激化している。今回
のRFAの共同声明が「タイ・ギリヲの聖域」を目標とすることを中心
にのほ、タイの聖域宣言としての比重もこのことはから、タイギリヲの
態度を明らかにするものに他ならない。また、ラオスにおける内戦十数年は
今、決定的にアジアの力関係の逆転によって、ローマ政権の危機をひきお
こすであろう。

二のようなるA B A C参加国の政治情勢が、何よりも雄弁に「A B A Cは戦争同盟にしない。沖縄とA B A Cは結びつかない」といふ、日本政府の言明を述べたのはさだにしている。既に韓国はP A T O (N A T O大軍増援)を構想し、フィリピンの一兵への支持をいまして、今回の公談は、何よりも、アジアの反共国家による反革命同盟強化であることをやるの特徴とする。火を吹くアジアに対して、A B A C → P A T Oを乗り切らんとするアジアのブルジョア共に、日本財閥が、学生の銃の二ふしを手にきつつけよ。

2 日米アシア安保の急速な
再編

世界に冠たるアメリカは、今やおちた偶像でしかない。或る世界地図を手に、日本は世界の覇者である。アジアに冠たる日本に

つき進まんとしている。——ヨーロッパの中心たうんとしている西独と同様に、しなし、米英仏なら、米曰、米独への朝臣主同盟枢軸の移行は、何よりも決定的な米帝の危機とそれに伴うE.M.P体制の崩壊、トルボンド、フラン危機を救う道を見いだせない。ベトナムは米を決定づけたのだ。

日帝と東亞アジアに焦點をあわせて、日米アジア同盟の再締結を見るべからば、そこには、日帝がまぎれもなく、アジアの盟主たるものであることと考へなければならぬ。

曰帝の対外援助総額の内に占める東南アジア援助（ヘリ資本輸出）は、62年以降急速に膨張を遂げてきた。援助総額に占める中南米援助の比率は62年33%なり、67年54%と激増しているのに比して、東南アジアに対しては62年20%なり、67年48%とふえる一方、65年日韓条約締結時においては、韓国、インドネシアにおいては米国のめく援助額であり、各国輸出市場の37%（韓国、24%）を占めている。しかも、今年にはいってからの日帝の対外輸出の特徴は、①、今年より現在までの援助量をさらに拡大すること。②インド、パキスタンまで拡充していた援助対象を韓国、台湾、インドネシア中心にしぼり、せいぜいタイまでとする。③この間、南米援助等で確立した基礎を基にしつつ、資本、労働力をもねらった資本輸出を増大させていふ点とする。という三点である。

昨年「日韓条約」になり現在までの政策の中心たる対外侵略を二層、積
 極化すると同時に、東南アジアに焦点を移した資本輸出の拡大、強化
 によって、独自の市場形成へと向々わんとする日帝——ASPCAの完
 全主として日帝の姿をそこにはきかた上なってくる。まさに、極東ア
 シア革命にとっての打倒対象は、ASPCA——VPATのの中に集つて
 られて存在しているのだ。

ところで、二つした日帝と東南アジアの關係をもつて、直ちに「米日
の市場再分割戦」といつた把握をなすヤント諸君のために、二つした日
帝の功同じまた「日米アジア同盟の再編過程」としてのみ把之傳ふのべと
いうことをはつきりさせておかなねばならない。へもろろん、中枝派の如
き「運命共同體」説者は説外としての話にならぬ。

すむゆゑ、この間の日米間の矛盾対立は、米口や、せんい製品、重化
 学工業品における「対日輸入制限措置」を強める方向に激化しているこ
 とは事實である。日本の口取収支の悪化を支えてきたもののな、対米輸出
 の拡大によるものであったことを考えるならば、これは日本としては認
 めることのできぬ措置であり、また自動車産業に於ける自任体制を堅忍
 の二ととしている。

しなし、二水りの対立は、米口のドル危機、戦後世界体制の基盤としてのＥＦＦ体制の崩壊を招くに至る段階では、曰帝は決定的にその「捕縛」の枠内を突き破るのを許さずといふ。この「捕縛」の枠内を突き破るのを許さずといふ。この「捕縛」の枠内を突き破るのを許さずといふ。